

書評

L. A. Maddox ed.
Rethinking Wesley's Theology
For Contemporary Methodism
 (Nashville: Abingdon, 1998)

野村 誠

マドックスが編纂したこの本は現代のウェスレー - 神学の状況とその傾向を示しているので紹介したい。この本には J. モルトマンの序文で始まり編者を含め、ウェスレー神学者 14 人による新しい研究が掲載されている。

概要

第 1 章 K. L. カルダー(Carder)

「なにがウェスレーの思想を異色なものとさせるのか？」

ウェスレーの思想は神学と教会の実践的生活を橋渡しする役割を果たし、信徒が重んじられ実践的活躍が期待されている。ウェスレーは信徒を教育し神学や教義を教え訓練して福音伝道に活用し、ウェスレーの説教集、『新約聖書註解』が信徒訓練のテキストとして用いられたことを評価している。社会の中で教会がキリストに贖われた共同体として不正、獄中の囚人、差別、貧困などの是正を求めている。ウェスレーは社会の問題と絶えず直面して福音を語っていた。そして三位一体の神の正義の実現、寛容、喜びの実現を告知している。カルダーは北米のメソジスト教会の伝道が心理学や社会学、市場経済の影響を受け人間中心主義になり神学が中心になっていないことを批判し、ウェスレーが文化社会を理解しつつも三位一体の神に基づき神学を中心

に伝道していたことを指摘している。

第2章 T. A. ラングフォード(Langford)「ジョン・ウェスレーと神学の方法」

ウェスレーの神学は伝道方法の型と靈性の型の二つに特色がある。ウェスレーは聴衆者の社会的状況を勘案した伝道方法を用いている。アイザックニュートンに代表されるように自然科学が発展し理性や意志が重んじられる啓蒙主義の時代の中で人々に、神の自由な恵みと「先行の恩恵」(prevenient grace)と人間の自由な応答を説いた。さらにトータルなバランスを維持しているところに特色がある。神学と実践、信仰と体験、教会と社会、伝統と革新などの具体的な次元でウェスレーの神学はバランスを維持している。それゆえウェスレー神学との対話をとうして我々の神学を修正しバランスをとり、福音を文化的状況の中で語り、変化する時代の要請に正確に対応することができる。

第3章 M. スチョッキー(Suchocki)「完全な祈り」

スチョッキーは『キリスト者の完全に関する平明な解説』をメソジズムとウェスレー神学の聖化論や神学思想の簡潔な要諦であると高く評価している。このなかで出てくる祈りをとりあげて神と人との関係、神の創造の業への参与について述べている。罪深く問題多いこの世で祈りにより神の愛と命が与えられダイナミックな神の贖いの業をわれわれは体験する。祈りは教会をとうして社会を変える力がある。そして祈りはわたしたちの内に働いて恵みによりわれわれを完全へと変えてゆく手段であると述べている。

第4章 T. W. ジェニングス(Jennings Jr.)

「超越、正義、そして慈悲：(ウェスレー的)神の再概念化へ」

ジェニングスはウェスレー神学から現代の神学・哲学との対話を神の概念を中心にして試みる。現代の神学・哲学者は抽象的であるのに対し、ウェスレーの神概念に具体的な意味を認め、神の統治は神の正義と恵みから分離できないと言う。そしてウェスレーの立場からバルトをはじめとする現代の神学者と対話を試みている。すなわちバルト神学を「絶対他者としての神」と

述べて考察している。また仏の哲学者エマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Levinas) を「他者なる顔」と述べる。ジェニングスは韓国の「民衆」の神学を取り上げ、まさに他者は社会の周辺にいる奴隷・子供・女性であり、他者は神であると見なす。つまり社会の周辺にいる「民衆」こそ歴史の主体、社会変革の担い手として、まさに神が共にいたもう人々とし見なして評価している。仏の哲学者ジャック・デリダ (Jacques Derrida) のロゴス論もとりあげ対話している。そしてウェスレーの神概念は虐待され卑しめられたものとの関係において神の真実の存在があると述べ、神を超越、正義、慈悲の概念を含んだものと理解する。この世から全く超越した神ではなく、この世に謙虚に降り下り苦難を受けた神であると語る。一方でウェスレーは英国の貧困に立ち向かった民衆の神学者であり神学と教会は民衆とともにあると語る。

第5章 M. D. ミークス (Meeks)

「聖化と経済：執事についてのウェスレー的考察」

執事についてのウェスレーの理解について、ミークスは近代市場経済が極端に私有化され歪められていることを指摘する。つまり貧しい弱者が市場原理により徹底的に搾取され弱肉強食の競争原理となっていると批判する。そして聖書の伝統の執事理解によるならば、人生をより豊かにすることができる、と述べる。豊かな富める者は貧しく抑圧搾取された者への慈善がなされねばならないことを信仰的義務として語る。そして必要以上に蓄え施さないこと、貪りは殺人罪や姦淫と同罪であるとウェスレーの説教 87「富めることの危機」(The Danger of Riches)より述べる。また時を聖化しなくてはならず、聖日 (sabbath) と借金と奴隷が解放されたヨベルの年 (Jubilee) を守らねばならないことを語る。聖書と神の約束なしでは教会は市場原理により支配される。しかし生きる神のことはの内に教会が存在するなら世界を聖化し神の家族とする。

第6章 M. マルクアド (Marquardt)

「キリスト者の回心：われわれの人生を神に結び付けること」

マルクアドはキリスト者の回心をわれわれの人生を神に結び付けることと語る。また神がその民を訪ねると述べ、神と人の相互の結び付きを「契約」(covenant)と語る。「キリスト者の回心」を個人と神の次元のみならず他者そして世界へと広げて理解する。また救済は新生し神のイメージに更新されるプロセスであると語り、われわれの更新は神との本質的關係であり他者との關係であり世界との關係にまで広がる、つまりキリスト者の回心は神を中心とする共同体の形成へとつながるマルクアドは述べる。

第7章 J. C. ローガン(Logan)

「キリストを献げる (Offering Christ): 今日のウェスレー的伝道論」
ウェスレーの伝道論は神学的統一性、人格的信頼、社会的良心の回復を目指すものである。今日のウェスレー的伝道論はキリストを献げる (Offering Christ)こと神の恵みに基づく「先行の恩恵」「義認と聖化」に源があるとローガンは主張する。すなわち神の言葉なるキリストを伝える、キリストの預言者 祭司 王の三職を宣教することが今日のウェスレー的伝道論と説く。全世界的神の恵みの愛に基づきすべての人が救いに招かれている、そこで福音を聞いたものは「先行の恩恵」により応答する。さらに福音は社会的良心が伴い奴隷制をはじめとして社会的不正、貧困、差別抑圧などの解決がはかられる。聖化は個人のみならず社会へと広がるとローガンは語る。

第8章 B. E. ベック(Beck)「連合体(Connexion)と聖徒の交わり (Koinonia): ウェスレーの遺産とエキュメニカルの理想」

ベックは教会論に焦点をあてメソジズムの伝統としての連合体(Connexion)からエキュメニカルモデルとしての聖徒の交わり(Koinonia)に言及する。それはウェスレーの説教「カトリックな精神」に示されているようにキリストを信じる全ての人に宗派を越えてエキュメニカルな聖徒の交わり(Koinonia)は広がるのである。

第9章 M. E. M.モール(Moore)

「三位一体と契約職制: ウェスレー派の伝統の研究」

モールはメソジズムの職制は多様性と統合を含んだ、三位一体的契約職制にあるという。ウェスレーは三位一体の神の交わりと一致から多様性と統合というメソジズムの特色が生まれている。そして神と人の関係は契約に基づくものとして牧師職も理解されているとモールは語る。

次の四人はメソジズムが生まれた英語文化圏と異なった文化からの発言として意味をもっている。

第 10 章 J. L. ゴンザレツ(González)

「ウェスレーはスペイン語で読まれ得るか」

ゴンザレツはキューバ生まれのアメリカで活躍する学者である。ウェスレーの神学と霊性はウェスレーのスペイン文化との接触によって影響されているとゴンザレツは語る。ウェスレーより一世紀前のスペインの静寂主義の神秘思想家ミゲル・デ・モリノ (Miguel de Molino)の著書で英語訳された *The Spiritual Guide Which Disintangles the Soul* にウェスレーは影響されているという。もちろんヨハネス・タウラー (Johannes Tauler)やテオロギア・ゲルマニカ (*Theologia Germanica*) などのドイツ神秘思想家にも影響されている。しかしスペインの神秘思想家ゴンザレツやグレゴリオ・ロペス (Gregorio Lopez) などからも学んでいる。ロペスは敬虔な神秘思想家でメキシコで伝道し病人を癒し神との神秘的一致の内に 30 年間過ごしウェスレーの完全論に影響を与えたとゴンザレツは述べる。

第 11 章 J. M. ボニノ (Bonino)

「ラテン・アメリカにおけるウェスレー：神学的そして歴史的考察」

ボニノはウェスレー神学がラテン・アメリカの問題状況に大変実り豊かに効果的に当てはまるのを発見している。ラテン・アメリカの解放の神学にとってウェスレー神学は理解を深め、貧富の格差が激しく不公平な人権が抑圧されている社会で社会正義の確立に有効であるという。なぜならウェスレーの完全論は神の愛に基づく個人の救済だけでなく「社会的聖化」や「社会的キリスト教」へとつながるからであると言う。グスタボ・グティエレッツ

(Gustavo Gutierrez)やジョン・ソブリノ(Jon Sobrino)の解放の神学に共通するものがあり、ウェスレーは神の愛に基づく社会正義から奴隷制に反対し、貧困・抑圧・獄中にある囚人・傷ついた者の救済解放を唱え実践した。しかし神学の枠から離れ神の啓示を忘れると歪められたウェスレー 神学となりかねない可能性も懸念している。

第12章 P. グラソー(Grassow)

「ジョン・ウェスレーと革命: 南アフリカからの見解」

グラソーはもしウェスレーに政治神学がありうとするならば、南アフリカで全体性の回復のために示唆を与えるだろうという。ウェスレーはアメリカの分離独立にも反対し、革命的变化に反対した。しかしウェスレーは神の国を実現を目指す社会的活動が強く、神の権威と統治、神の自由を認め民主的的社会を作ることを目指した。ウェスレーの思想には政治神学があり、南アフリカの貧困と辺鄙さに改革発展の力を与える。特に抑圧されている人権の解放を唱え神の国の実現をめざすウェスレー神学は南アフリカにとって政治神学となるだろうと語る。

第13章 H. リー(Lee)

「ウェスレーとマカリウス(Macarius)における聖霊体験」

アジアの韓国からリーはウェスレーと四世紀シリアのマカリウスの聖霊体験を比較し、東方キリスト教の要素がウェスレーの聖霊論にあり、それはアジアだけでなく全世界のメソジストそしてキリスト者に霊性を約束するものであると述べる。リーはウェスレーの説教「聖書における救いへの道」にその根拠を見いだす。ウェスレーはマカリウスの説教集をアメリカのサバナで読み 1749年にキリスト教文庫(the Christian Library)の一冊として出版した。ウェスレーは東方の教会教父ニッサのグレゴリウスやシリアのエフラエムから学んでいるが、特にマカリウスから神と人の霊的協力による創造そして変貌を学んでいるとリーは主張している。さらにウェスレーはマカリウスの説教集から霊性と禁欲の精神(ascetical spirituality)を受け継いでおり、東方の神学とくにシリアの影響が強く、抽象的と言うより具体的経験を

評価していると語る。そして神の霊が具体的に我々のうちに住み働き神と人との協力によって神のようになるという神化をウェスレーの完全論は目指している。東方神学のマカリウスから影響を受けたウェスレー神学からはグローバルでエキュメニカルなキリスト教が創造されるとリーは述べる。マカリウスは個人の新生のみならず自然界の終末論的霊的の新生と変貌を唱えた。アジアの神学の形成にメソジズムは貢献するものである。

第 14 章 R. L. マドックス(Maddox)

「遺産に立ち返る：メソジスト神学史における神学者ウェスレー」

ウェスレーはメソジズム神学の源として研究され続けねばならないと主張する。マドックスはウェスレー神学は源流のアングリカンをこえて拡大しアングロ・サクソンを離れた周辺領域で生き生きと活躍していると指摘する。ウェスレーは神学思想だけでなく社会的関心が強かったので貧困や社会的不正を是正すべきことに努めたことを評価している。

おわりに

この本ではウェスレー神学の学際的特色に価値を見いだしている。ウェスレー神学は神学と社会、信仰と実践、聖と俗の両方の次元にわたって深く影響を与えていると語っている。さらに現在、ウェスレー神学は国際的に広がり、ラテン・アメリカ、アフリカ、スペイン、韓国などの現場から生きたメソジズムの信仰が述べられている。

(共愛学園 前橋国際大学助教授)